

広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	中高ドイツ語の数詞について〈特集〉
Author(s)	岡崎, 忠弘
Citation	広大言語 , 7 : 3 - 7
Issue Date	1967-12-18
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00046264
Right	
Relation	



ている。

しかし、前出の Rohlfs, G. によれば、『uno との複合基数詞の後に続く名詞は、たい
てい、複数形である。eg. trentuno soldati「31人の兵士」(単数なら solda
to), etc まれには単数形も用いられる。eg. ventun libro, etc.』となつてい
る。さらに、Gabrielli, A. 「現代言語学辞典」1956、Verona も、このほかの
多くの学者も、複数形が一般的で、単数形は避けるべきだとしている。

古くは、どうだったのであろうか？ラテン語では、例えば「21人」と云う時には、Vigin-
ti unus homines と云つたのであるから、複数形(homines)を用いるのが伝統
だったのである。(単数なら homo)。フランス語でも、eg. vingt et un chev-
aux「21頭の馬」の如く、複数形が用いられる。(単数なら cheval)。

だから、Gabrielli, A. も云っているように、le mille e una notte「
千一夜」は、今や決り文句になつているが、本来なら le mille e un notti と、no-
tte を複数形の notti にすべき所であろう。(上の例において、una notte と、un
(o)が una になつているのは、notte が女性名詞だからである)。

ただ、この単数の用法は、何時頃から現れたものか？また、何故現れたのか？(20人でな
くて、21人と云う1人半端が居ると云う点が強調された時、単数が現れる、etc. が予測
できる。)また、現代語でも使われているとすれば、どんな場合にか？etc の問題が残され
ている。

§4 おわりに

本稿では、数詞に関する2つの問題を取りあげたにすぎないが、問題点は探せばいくらでも
出てくるものである。また、本稿では、問題点の記述に留まり、その解決に至らなかつたのは
残念であるが、今後の努力によつては、それも可能であろう。

中高ドイツ語の数詞について

岡 崎 忠 弘

この小論の目的は数詞について問題点を探り出し、それを資料を駆使して論究を試みよう
とすることにはない。新高ドイツ語(nhd.)の数詞と違って中高ドイツ語(mhd.)のそれはそ

の用法に於いて複雑で、十分はつきりとは把握し難い。この数詞の複雑性を、今回のテーマに乗じて、出来る限り整理しようと思う。以下、mhd.の数詞についてまとめる。

§ 1 基数とその格変化；

数詞123はnhd.ではingeschlechtigであるが、mhd.では男性、中性、女性の三つの性を有し、また格変化をなす。ein, einer, einiu, einez は形容詞の強変化と同じ格変化をなす。表示すると次のようになる。

	m.	f.	n.
Nom.	einer, ein	einu, ein	einez, ein
Gen.	eines	einer	eines
Dat.	einem [e]	einer	einem [e]
Akk.	einen	eine	einez, ein

但し、定冠詞や代名詞に先行されると弱変化をなす。"einzig allein"の意味に於いては常に弱変化(eine)をなし、またこの場合には複数をも形成し得る。Z. B. zeinen (=ze einen) pfingesten, in einen zten, zeinen sunewenden, usw.人称代名詞のGen.のあとでは強変化をなす。Z. B. mⁿ eines hant.

こゝでein (<germ. ^{*}ain-a-z < idg. ^{*}oin-o-s)の有する三つの機能について言及しておく。

(i) 数詞 "eins, einzig, allein, alleinig" ;

- a) 数詞einは原則として強変化の形容詞と同じ活用をなすが、ahd., mhd.では代名詞及び定冠詞のうしろでは弱変化をもなす。
- b) 数詞einは"allein"の意味に於いては弱変化をなす。
- c) 名詞化された数詞は、若し冠詞を伴わずに使用される場合には強変化する。
- d) 若し冠詞が先行すると名詞化された数詞は弱変化する。

(ii) 不定代名詞 "irgendein, ein gewisser" ;

- a) 不定代名詞 ein は原則として強変化の形容詞と同じ活用をなす。
- b) 名詞化された不定代名詞は若し冠詞を伴わなければ強変化をなす。
- c) この場合、定冠詞が先行すると、弱変化をなす。

(iii) 不定冠詞；

不定冠詞 ein は強変化する。また、ein を含む合成語、たとへば、dehein

irgendeiner“ や nehein“keiner も強変化の形容詞と同様の格変化をなす。

数詞 zwei は次のように格変化をなす。

	m.	f.	n.
Nom.	zwêne	zwô, zwuo, zwâ	zwei
Gen.	zweier	zweier	zweier
Dat.	zwein, zweien	zwein, zweien	zwein, zweien
Akk.	zwêne	zwô, zwuô, zwê	zwei

数詞 drei は元*tri*-Stammとして格変化していたが、ahd. や mhd. に於いては形容詞変化への順応の度合が大きくなつてきている。

	m. f.	n.
Nom.	dr↑, dr↑e	driu
Gen.	dr↑er	dr↑er
Dat.	drin, dr↑(e)n	drin, dr↑(e)n
Akk.	dr↑, dr↑e	driu

dat. に於いては短い*i*をもつた形drinが本来の形(=got. *þrim*, ahd. *drim*)であり、dr↑nの長い↑は他の格の影響によつて生じたものである。男性、女性のNom. 及びAkk. のdr↑eとDat. のdr↑enは古形dr↑, drin, dr↑nのNebenformであるのだが、形容詞変化への推移に基いている(dr↑-e=guot-e, dr↑-en=guot-en)。

[註] ドイツ語に於いては今尚数詞2と3は一部ではmehrgeschlechtigである。

4から12までの数詞は無語尾か強変化の形容詞語尾のいずれかをとる：

4 vier は格変化をなし、男性女性のNom. Akk.はviere, 中性はvieriu. Gen.はvierer, vierre, viere, Dat.はvieren. — 5 fünf, fünf, 古くはfinf, 格変化してfünfte. — 6 sehs, 格変化してsehse. — 7 siben, 格変化して sibene. — 8 aht, 格変化して ante, ähte. — 9 niun, 格

変化して niune. — 10 zēhen, 格変化して zēhne.

11と12は -lif を付して作る(註: この -lif は印欧語の lik = übrig sein に由来するものという説があり、それが事実であれば elf の語義は「一つ余る」であつて、即ち「十を越すこと一つ」の意、zwölf は「十を越すこと二つ」の意味となる。相良守峰: ドイツ文法)。11 einlif, einlef, eilif, eilf, elf; 12 zwelif, zwelf.

[註] mhd. には次の語形も見うけられる:

— 6 sess, — 7 suben, — 9 nûn, — 10 zêh, — 12 zwolf, zwulf.

以下の数詞は無語尾で用いる。また元来中性名詞であつた hundred や tûsent も無語尾である。— 13 dr̄zēhen, driuzēhen, — 14 vierzēhen, — 15 fûnrzēhen, — 16 sêhzēhen, — 17 sibenzēhen, — 18 ahtzēhen, — 19 niunzēhen, — 20 zweinzec, 稀に zwênzec (zwanzig はおよそ 1400 年頃になつてようやく用いられ始める), — 21 einez unde zweinzec, — 22 zwei unde zweinzec usw. — 30 dr̄zec, — 40 vierzec, — 50 fünfzec, — 60 sêhzec, — 70 sibenzec, — 80 ahtzec, — 90 niunzec, — 100 zēhenzec, これは古形で 13 世紀に消滅した、同じく hunt も稀。普通は hundred, これは本来は中性名詞。

150 fünfzec unde hundred, hundred unde fünfzec, — 200 zweihundert, — 300 driu-hundert usw., 1000 zēhenhuht, zēhnhundert しかし、ふつうは中性名詞 tûsent を用いる。— 2000 zwei tûsent, 稀に zwei nzec hundred, — 10000 hundred tûsent, 稀に zēhenzec tûsnt.

§ 2 序数

eins と zwei の序数は基数の語幹からは形成されない。erste は ê, êr の最高級であり、ander (anderer, anderiu, anderez) は Pronominaladjektiv であり、これは mhd. では強・弱の両方に变化せしめられる。zweite は 15 世紀になつてようやく現われる。尚、序数は大体に於いて弱変化をなす。

これ以外の序数はそれぞれの基数から導き出される。— 3 dritte, — 4 vierde, — 5 fünfte, fûnfte, 古くは finfte — 6 sehste, — 7 sibente, sibende, — 8 ahtode, ahtede, 普通 ahte, — 9 niunte, niunde,

— 10 zéhente, zéhende, — 11 einlifte, eilifte, eilfte, elf
 te, — 12 zwelifte, zwelfte, — 13 drîzéhende, driuzehende,
 — 14 vier zéhende usw. — 20 zweinzegeste, zwênzegste,
 — 21 einez unde zweinzegeste, êrste unde zweinzegste,
 — 30 drîzegeste, — 40 vierzegeste, usw. — 100 zéhenzegeste,
 hunderteste, — 1000 tûsendeste, tûsentste.

(完)

言葉の色々な数字

大庭拓郎

*1 言葉、生活環境は異つていても人間考えることは同じと見えます。例えば次の格言に於いては共に「あることにひいでている人でも時々誤りをする」ということを表現しています。仏人は馬で表現し、英米人はかの有名なホームーで、日本人は弘法で、あるいは猿でそのことを表現しています。

仏人 Il n'y a si bon cheval qui ne
 bronche. (どんなよい馬でもつまづく。)

英米人 Even Homer sometimes nods.

日本人 「弘法も筆の誤り」「猿も木から落ちる」

広大言語第4号「フランスの諺」(原野昇著)

*2 足を無数に持つているあの気味の悪い「ムカデ」は漢字で書けば百足となりますがこれを英語ではcentiqepeと書きますが、この語源を調べてみるとラテン語のcentum(100)+Pēs(foot)⇒hundred-footed insectでcentipedeとなります。ドイツ語ではder Tausendfüß, 仏語ではle centpieds であり、百も千も共に「すごく沢山あること」を意味しています。更に足の数が多くなると、たとえば「やすで」の様なものは百萬足と考えてmillipede になつています。

*3 「百足」「千足」のムカデの話はこの辺にして少し日常の表現の中に見られる数字につ